中国での「日本の特別支援学校における特別活動」実践報告

鈴木　正実
（教育実践コース２年）

「中国の小学生相手に授業を行うことができる」と聞いて、すぐに手を挙げた。私が行ってきた「特別支援学校での特別活動の授業」を言葉や文化が違う中国の児童に実践したいと思った。

私は特別支援学校の特別活動の時間に、構成的グループエンカウンターの授業を行ってきた。特別支援学校に在籍する児童生徒は、障害の種類や程度が様々である。そのため、授業の中では、ショートエクササイズを多数設定し、子どもたちが自分で参加したいものを選択できるようにする。その理由は、①子どもたちの多種多様な障害に対応できること、②自分が苦手なエクササイズには参加しなくていいこと、③自分ができそうな活動に参加できること、が挙げられる。そして、これをクラス対抗のゲーム形式で行う。複数のエクササイズの中から自分が参加する種目を話し合いで決定させ、クラス代表として出場する。これによって、子どもたちは意欲的に学習に参加することができると同時に、全ての子どもが活躍できる機会や、クラスの友達に応援される嬉しさを経験することができる。この授業を通して子どもたちの「自己開示」「自己主張」「他者受容」「信頼感」「役割遂行」といったことを引き出すことが期待できる。

以上のような特別活動の授業を、貴州省にある遵義愷瑞学校の小学６年生の児童に対して「日本の特別支援学校の授業を体験する」というテーマで行ってきた。以下に遵義愷瑞学校に送った指導案（略案）を抜粋し、授業の実際を述べる。

１　単元名

日本の特別支援学校の特別活動を体験しよう！　～最強戦・チーム対抗ゲーム大会～

２　単元の目標

・特別支援学校の授業の様子を見て、体験して、学ぶ。
・みんなと一緒にゲームを楽しむことができる。
・チームメイトを応援することができる。
・学級所属感を高めることができる。

３　授業の概要

４チームに分かれて全員参加型のゲーム大会を行う。教師がミニゲームを複数設定し、チームメイト同士で作戦を立てることで、全員が活躍できる場面をつくる。この活動を通して、チームメイトを応援する児童の姿を引き出し、一人一人の学級所属感を高めたい。

４　展開

⑴　日本の特別支援学校での授業説明（授業の様子の動画を見せながら）
⑵　ゲーム

① 喋らず仲間を見つけよう！（背中のカードでチーム分け）
② ジャンケン（１名）
③ 早口言葉（２名）
④ ひも引き（２名）
⑤ 叩いてかぶってじゃんけんぽん（職員１名）
⑥ この子の好きな答えを探せ！（２名）
⑦ 一発ボッチャ（２名）
⑧ 感想を漢字一文字で表そう！（全員）

5　授業の実際

最初に、遵義愷瑞学校の児童（３０名）に対して、日本の特別支援学校で行った特別活動の授業を動画で見せた。児童は皆、真剣な表情で日本の特別支援学校の授業の様子を眺めていた。その後、「この授業を皆さんに体験してもらいます」と告げると、一様に笑顔になり、期待を持った様子で友達と会話をする姿が見られた。

７～８人で１つのグループになり、話し合いで誰がどのエクササイズに参加するかを選ばせた。グループの中では、リーダー的な児童が中心になって積極的に話し合いを進行したり、児童が自ら手を挙げて参加したい種目を伝えたりする姿が見られた。

どのエクササイズでも、自分のグループを応援する姿が見られ、大いに盛り上がった。自分のグループの友達が勝つと、ハイタッチをしたり抱き合ったりする姿が見られ、負けた代表にみんなで励ます姿が見られた。どの子にも活躍する場があり、友達を一生懸命に応援していた。

最後には、振り返りとして、この感想を漢字一文字で表してもらった。

爽	８名
酷	５名
趣	４名
好	３名
棒	２名
玩、心、幸、遊、新、妙、禾、广	１名

授業後、中国の先生方と検討会が行われた。中国の先生方も「子どもを育てたい」という意欲に溢れ、活発な意見や感想が出された。中国の年配の先生が「日本の先生は、子どもと一緒になって感情豊かに喜び、笑いながら授業を行っていた。中国の先生はそこが少し足りないと思う」と言っていた。

授業を通して中国の子どもたちを知ることができた。そして、「子どもの教育」を合い言葉に、中国の先生方と意見交換し深く交流できたことに感謝している。